



ポータブルレントゲン

8

他国の国際緊急援助チームにはあまり装備されていない「ポータブルレントゲン」。放射線技師がメンバーとなる日本のJDRならではのアイテムだ。小型のため、テント内でも十分使用できるほか、撮影結果をパソコン上で確認できるので、現像のための機材や廃液の心配もいらない。2005年のパキスタン地震以降、JDRで使われてきたポータブルレントゲンは、「正しい診断が下せる」と医師の間で好評だ。



ダブルブレードカッター

5

国内の救助活動ではあまり使われてこなかった「ダブルブレードカッター」。刃の半径(15センチ程度)の深さまでしか切れない1枚刃のエンジンカッターと比べ、2枚刃のダブルブレードカッターは中心の留め金の出っ張りがなく、40センチほどの厚さのものまで切れる。作業効率が高まることから、ここ1年の間にJDRで導入されるようになった。



ベスト

2

医療チームのシンボルが、背中に「JAPAN国際緊急援助隊」と刻まれたこの「ベスト」。暑い地域での着心地を考え素材はメッシュ。機能性を重視し、さまざまな形状のポケットが計9個もある。左肩にはマグライトが、右胸には無線や携帯電話が入る。また腹部には、大きな二重ポケットがあり、隊員はファスナー付きの奥ポケットに貴重品を、手前に使用頻度の高いペンやメモ帳などを入れている。



十字テント

1

活動の核となるのがYKK AP(株)と共同開発した「十字テント」。雨風に強く、ファスナーで各パーツを連結することで用途に合わせた形に設営できる。以前は一般的ななまぼこ型を使用。しかしテント内には、受付、診察、処置、検査、薬局といったセクションがあり、患者や隊員の動線が確保できていなかった。そこで、より医療活動に適したテントを開発。その後も窓を増やすなど改良を重ねている。



地震警報機

9

地震の被災地で活動するときに欠かせないのが、可搬式の「地震警報機」。人が感じない地震の初期微動P波を感知すると、音とランプで知らせるシステム。その後の大きな揺れを予知し、二次災害の防止に役立つ。隊員の安全確保のために2009年から導入され、救助中でも警報が発せられると隊員は一時退避することになっている。



アルファ米

6

水さえあればふんわりしたご飯ができる「アルファ米」。一度炊いたお米を乾燥(アルファ化)させることで長期保存を可能にし、保存食・非常食として国内でも備蓄される。白米以外にも、五目ご飯や炊き込みご飯、白がゆなどもあり、味が豊富。また、腹持ちもよいことから、過酷な環境の中、隊員たちが元気に活動するための力の源となっている。



救助犬

3

2003年のアルジェリア地震以降、JDR救助チームの一員として共に派遣されるようになった「救助犬」。人間にはないその鋭い嗅覚を使い、倒壊した家屋や土砂などに埋もれた行方不明者を捜索、発見するとほえるよう訓練されている。昨年の中国西部大地震の際は、4人のハンドラーのもと、3頭の救助犬が活躍した。



ボーカメ

10

棒の先端にカメラが付いていることから、「ボーカメ」と名付けられたこの救助機材。人間の入れないがれきのすき間から棒を挿入し、行方不明者を捜索する。棒は最大で4メートルまで伸び、モニターで中の様子を確認しながら作業できる。また、先端にはスピーカーとマイクも付いており、音声で生存者を探知することも可能。



衛星電話

7

被災地の様子や活動状況をJICA本部内のJDR事務局に報告し、また事務局からの指示を被災地に伝えるために不可欠な「衛星電話」。通信速度はそれほど速くないものの、インターネットができる上、FAXやEメールで写真・文書を送ることもできる。各チーム、移動中に便利な電話・アンテナ一体型と、アンテナが大きくより性能の高い分離型の2種類を携行している。



ジュラルミンケース

4

隊員の間では「ジュラケ」と呼ばれている機能性に優れた「ジュラルミン(金属)ケース」。側面のカバーを開けると、薬剤、医療機材(ガーゼや包帯、針、糸など)、事務用品(カルテなど)が種類別に入った棚に変身する。テント設営後、迅速かつ効率よく医療活動を開始できるよう、事務局がその改良にかかわった。3チーム分が成田空港そばの倉庫に備蓄されている。



JDR、 こだわりの 10アイテム

迅速かつ効率的に活動し、より多くの人命を救うため、国際緊急援助隊(JDR)が導入したこだわりの携行品。これまでの経験から編み出されたモノ、独自に開発・改良したモノ、他のチームにはないモノ、隊員の士気を高めるモノなど、JDRの活動を強力にバックアップするアイテムの数々を紹介する。